

「歓喜の風」に「こまる」で金賞

今年も日本一の米を

小見山 益彦さん
静岡県小山町



【静岡支局】小山町桑木で水稻4畝を栽培するのは、小見山益彦さん(66)。妻の恵美子さん(65)と共に富士山の麓に位置する標高600㍎の地で、50年以上「うまい米作り」に取り組む。昼夜の寒暖差を利用し、生産量より質を重視。「コシヒカリ」のほか「にこまる」「歓喜の風」を作付ける。

コンテストの賞状を手の小見山さん夫妻

歓喜の風は、2018年に農研機構で開発された水稻の品種で、新しい品種ができて農家が歓喜する様子を想起して名付けられた。耐倒伏性の「ふくいずみ」と極早生・多収の「越南208号」を交配。多収の早生品種で、高温下でも玄米の外観品質の低下が少ない。倒伏しにくく、「キヌヒカリ」より9%多収で、多肥条件下では、14%の多収が見込まれる。小見山さんが栽培した歓喜の風は、22年に行われた「第19回お米日本一コンテストinしずおか」で最高金賞と静岡県知事賞を受賞した。このコンテストでは、同じ条件で炊飯し審査できるように、コンテスト前に炊飯器のメンテナンスが行われ、米のとき方や浸漬時間にも基準が定められている。

昼夜の寒暖差利用、質を重視 積算温度データ計測し適期収穫

よる食味官能審査を経て、最高金賞5点、静岡県知事賞1点が選出される。小見山さんの歓喜の風は外観や香り、味、粘り、硬さなどが高く評価された。

22年はこのほかにも「第13回大阪府民の「いっちゃんうまい」米コンテスト」で歓喜の風が入賞、「第6回こてんは・おやまお米コンテスト」で「こまる」が金賞に輝いた。栽培方法に信念を持ち、良質で安全・安心なうまい米を作ろうと、化学合成農薬・化学肥料を減らして「米の精7号」などの有機肥料を施す。適期に刈り取りできるようにするため、圃場出穂からの積算温度データを計測する。

「経験とノウハウ、そして勘所を生かして、妻と共に今年も日本一を目指したい」と小見山さん。既にブランド化された御殿場コシヒカリと共に、まだまだまれな歓喜の風の栽培に意欲を示す。

(杉山)